

比較のお天気に恵まれたゴールデンウィークでしたね。気持ちいい季節です。

5月を迎えますと、御堂筋のイチョウが美しくなります。春から初夏にかけて、若葉は見る間に大きく広がり、みどりが濃く、むせかえるような青葉の季節を迎えます。日本列島は帯状の高気圧でつつまれ、晴天の日が多くなります。ハイキングなどに絶好のシーズンですが、気候の変化に対してうまくからだに適応できにくい方には、この青葉の香りがかえって強い刺激になりすぎることもあります。「何となく気分がすぐれない」という方おられますか？「こころ」と「からだ」の不調和を自覚されたら、まずおくすりではなく、未来への希望をもって養生ができていくかどうか、チェックしてみてくださいね。

【ニュース】

1. **診療日の変更をお知らせします。**

5月の診療日の変更はありません。

6月10日（金曜日） **三谷外来 休診（夜診）**

6月11日（土曜日） **三谷外来 休診**

いずれも日本東洋医学会出席のため

2. **来月は糖尿病の足月間です。**

昨年引き続き、6月は糖尿病の足月間です。ムシムシする6月は、糖尿病の方にとって、足白

癬などの出やすい季節です。足をチェックしますので、ストッキングは脱いで、素足になりやすい格好でお越しください。

3. **東北・関東大震災への義援金**

4月にいただいた義援金30,124円を赤十字を通して送金しました。ご協力ありがとうございました。

【漢方のおはなし 未病について】



食物の料理法にもいろいろあります。日本料理、中国料理、インド料理、西洋料理…それぞれの風土、気候から考え出されたもので、その中から民族性が生まれたとも考えられます。日本人が海外に居住すると、梅干し、みそ汁、つけ物がむやみにほしくなるようです。日本人の体がそれを要求するのでしょう。

病気で同じ風土、気候、民族によって医療に違いがあってよいと考えます。もちろん人類共通の疾病があり、治療薬（抗生剤など）がありますが、微妙な民族の差を考え、伝統医学を改めて見直すのも大切です。さて、東洋医学の基本的考え方の一つに「未(み)病ヲ治ス」という言葉があります。未病とは、病気とはいえないが、健康でもないという状態です。こういう状態を早く治療しようという積極的な考え方です。西洋医学にも、予防接種など予防医学がありますが、その内容が少し違います。病気になってしまった人ではなく、病気にはまだなっていない人を治療するのが立派な医療行為というわけです。したがって日常生活、生き方・考え方についての指導も必要だと考えています。病気が完成してから薬を与えたり、治療するのは、水が飲みたくなったから井戸を掘りはじめるようなもので、もう少し早い段階で対策を考えています。

【外来担当医一覧 2011年5月現在】

予約電話番号：072-260-1601

診療受付時間	月	火	水	木	金	土
午前 (9:00-11:00)	巽	三谷	巽/三谷	巽	巽/三谷	三谷
午後 (14:00-16:00)	巽 (予約)		巽 (予約)	巽 (往診)	巽 (予約) 三谷 (往診)	
夜診 (16:30-18:30)		三谷	三谷		三谷	

【東北・関東大地震に寄せて 稲村の火】



東北・関東大地震に際し発生した津波の報に接し、私は1854年（安政元年）の安政南海地震津波に際して紀伊国広村（和歌山県広川町）で起きた故事をもとにした物語「稲村の火」を思い起こしました。地震が起きた後の津波への警戒と早期避難の重要性、人命救助のための犠牲的精神の発揮を説いたもので

小泉八雲作、中井常蔵の翻訳で、かつて国定国語教科書科書に掲載されていました。主人公・浜口五兵衛のモデルは濱口儀兵衛（梧陵）です。

「これはただ事ではない」とつぶやきながら、五兵衛は家から出てきた。今の地震は、別に烈しいというほどのものではなかった。しかし、長いゆったりとしたゆれ方と、うなるような地鳴りとは、老いた五兵衛には今まで経験したことのない不気味なものであった。五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見下ろした。村では豊年を祝う宵祭りの支度に心を取られて、さっきの地震には一向に気が付かないものようである。村から海へ移した五兵衛の目は、たちまちそこに吸いつけられてしまった。風とは反対に波が沖へ沖へと動いて、みるみる海岸には、広い砂原や黒い岩底が現れてきた。「大変だ。津波がやってくるに違いない」と、五兵衛は思った。

このままにしておいたら、四百の命が、村もろとも一のみによられてしまう。もう一刻も猶予はできない。「よし」と叫んで、家に駆け込んだ五兵衛は、大きな松明を持って飛び出してきた。そこには取り入れるばかりになっているたくさんの稲束が積んであった。「もったいないが、これで村中の命が救えるのだ」と、五兵衛は、いきなりその稲むらのひとつに火を移した。風にあおられて、火の手がぱっと上がった。一つ又一个、五兵衛は夢中で走った。こうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまうと、松明を捨てた。まるで失神したように、彼はそこに突っ立ったまま、沖の方を眺めていた。日はすでに没して、あたりがだんだん薄暗くなってきた。稲むらの火は天をこがした。山寺では、この火を見て早鐘をつき出した。「火事だ。庄屋さんの家だ」と、村の若い者は、急いで山手へ駆け出した。続いて、老人も、女も、子供も、若者の後を追うように駆け出した。

高台から見下ろしている五兵衛の目には、それが蟻の歩みのように、もどかしく思われた。やっと二十人程の若者が、かけ上がってきた。彼等は、すぐ火を消しにかかろうとする。五兵衛は大声で言った。「うっちゃっておけ。大変だ。村中の人に来てもらうんだ」村中の人、おいおい集まってきた。五兵衛は、後から後から上がってくる老幼男女を一人一人数えた。集まってきた人々は、もえている稲むらと五兵衛の顔とを、代わる代わる見比べた。その時、五兵衛は力いっぱい声で叫んだ。「見ろ。やってきたぞ」たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指差す方向を一同は見た。遠く海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。その線は見る見る太くなった。広くなった。非常な速さで押し寄せてきた。「津波だ」と、誰かが叫んだ。海水が、絶壁のように目の前に迫ったかと思うと、山がのしかかって来たような重さと、百雷の一時に落ちたようなとどろきとをもって、陸にぶつかった。人々は、我を忘れて後ろへ飛びのいた。雲のように山手へ突進してきた水煙の外は何物も見えなかった。人々は、自分などの村の上を荒れ狂って通る白い恐ろしい海を見た。二度三度、村の上を海は進み又退いた。高台では、しばらく何の話し声もなかった。一同は波にめぐりとられてあとかたもなくなった村を、ただあきれて見下ろしていた。稲むらの火は、風にあおられて又もえ上がり、夕やみに包まれたあたりを明るくした。

はじめて我にかえった村人は、この火によって救われたのだと気がつく、無言のまま五兵衛の前にひざまづいてしまった。